

# 日本の産科医療施設における在日ラオス人女性の 産後の伝統的プラクティスの実践可能性

埼玉県立大学大学院 保健医療福祉学研究科 博士論文

指導教員：鈴木幸子教授 延原弘章教授 金野倫子教授

2020年3月 学籍番号：1791003 氏名：齋藤恵子

## 研究背景・目的

女性の出身国の産後の伝統的プラクティスを実施できたかどうかは女性の健康や満足度に影響することが考えられ、伝統的プラクティスの実践が重要であると予測されるが、特に少数派である在日ラオス人の研究は我々が知る限りほとんどなく、在日ラオス人の伝統的プラクティスの認識とその実践、さらに、日本の産科医療施設での伝統的プラクティスへの対応についても明らかにされていない。

本研究の目的は在日ラオス人女性の産後の伝統的プラクティスに関して、日本の産科医療施設での実践の可能性を明らかにすることである。研究1では、先行文献から採用した6つの伝統的な産後のプラクティスについて、在日ラオス人女性がどのように捉えているか、どのように実践したかについて明らかにすることを目的とした。研究2では、産後の6つの伝統的プラクティスのうち、産科医療施設内で実践の工夫が必要と考えるユーファイ、キン・ナム・ホーン、カラム・キン、ホーム・ヤーに関して、埼玉県内の産科医療施設の産科病棟看護管理者の認知度、実践への支援の意向、自施設での実践の可能性について明らかにすることを目的とした。本研究を通じて、少数派を含む在日外国人女性に出会う機会が増えてきた看護職者が女性たちの母国の伝統的プラクティスの重要性を理解し、伝統的プラクティスを尊重したケアの実践に繋がると考えた。

## 研究1

### 【研究方法】

成育過程をラオスで過ごし、日本で出産を経験した33-58歳の日本在住ラオス人女性10人を対象に半構造的インタビューを実施した。調査期間は2016年4月から5月である。インタビューは産後の6つのプラクティスについて、それぞれの認識と日本での実践に関するもので、質的記述的に分析した。

### 【結果・考察】

全ての対象者は6つのプラクティスを伝統的慣習として認識し、一部のプラクテ

イスについては否定的な認識を持っていることを示す語りもみられたが、全体的には重要な価値を認識していた。実践に関しては、いくつかの慣習が簡略化され、一部は日本の物で代用して実践されていた。伝統的プラクティスを部分的に実践あるいは日本の物で代用した実践であっても、実践したことにより、幸福感や安心感を実感していた。一方、実践しなかった事例では、日本の家屋の構造や家族構成、医療従事者などのアドバイスが伝統的プラクティスを実践する上で、負の影響要因となっていることが示された。

## 研究 2

### 【研究方法】

埼玉県内の分娩を扱う全 121 施設の産科病棟看護管理者を対象に、自記式調査票の郵送調査を実施した。調査内容は年齢、施設概要、伝統的プラクティスの認知度、実践支援の意向と自施設での実践の可能性について、施設種別と各項目の関連について検討した。さらに、「外国人の分娩を円滑に受け入れるためにどんなことが必要だと思うか」と尋ね、質的に分析した。

### 【結果・考察】

81 人（病院 30、診療所 37、助産所 14）の回答を分析した。プラクティスについて、知っている者はユーファイ 3.7%、カラム・キン、ホーム・ヤーは 1.2%でキン・ナム・ホーンはいなかった。実践支援の意向はキン・ナム・ホーン、カラム・キンは肯定的回答の割合が高かった。施設の種別では、ユーファイは助産所の否定的回答の割合が低く、有意な差を認めた。実践の可能性は、ユーファイ、キン・ナム・ホーン、カラム・キンで肯定的回答の割合が高かった。助産所はユーファイ、キン・ナム・ホーン、ホーム・ヤーで肯定的回答の割合が著しく高く、施設の種別では有意な差を認めた。ラオスの産後の伝統的プラクティスについての認知度は低く、その理由は在日ラオス人が少ないためと考える。キン・ナム・ホーン、カラム・キンのような飲食に関する伝統的プラクティスへの対応は比較的可能な施設が多く、助産所は小規模施設であるため、特別なニーズを持つ女性への対応ができる可能性が他施設より高いと考えられた。このような伝統的プラクティスの対応に関する情報をラオス人女性に提供することが必要である。

外国人の分娩を円滑に受け入れるために必要なことは、「在日外国人が規則やマナー、施設の方針を理解して、コミュニケーション手段をもつ」、「医療施設

側の受け入れ体制を整備し、継続的・個別的な看護ケアを提供する」の2つのテーマが抽出された。少数派の在日外国人に対応するために、多言語に対応した医療通訳者の確保・活用によりコミュニケーション手段を確保することも重要な課題である。

#### 総括

本研究の目的は、在日ラオス人女性の産後の伝統的プラクティスに関して、日本の産科医療施設での実践の可能性を明らかにすることである。このため、研究1では全ての対象者は6つのプラクティスを伝統的慣習として認識し、重要な価値を認識していた。伝統的プラクティスを実践する上で、医療施設の対応や医師をはじめとする医療従事者などの認識が負の影響要因となっていることが示された。研究2では産後の6つの伝統的プラクティスのうち、産科医療施設内で実践の工夫が必要と考えるユーファイ、キン・ナム・ホーン、カラム・キン、ホーム・ヤーに関して、産科病棟看護管理者の認知度は低かった。その理由は在日ラオス人が少ないためと考えられた。少数派の在日外国人の伝統的プラクティスであっても、看護者は対象者の伝統的プラクティスを把握してそれが対象にどのような影響あるのか、健康に支障をきたす恐れがあるか否かをアセスメントし、女性や児に悪影響がない限り尊重していく姿勢が求められる。さらに、特別なニーズを持つ女性への産科医療施設における対応についての情報を対象となる女性に提供することが必要である。本研究は少数派移民の文化への感受性を高め、わが国の産科医療施設での伝統的プラクティス実践を支援する環境を整備する必要があることを示した。

本博士論文を通して少数派を含む在日外国人女性たちの母国の伝統的プラクティスの重要性を理解し、伝統的プラクティスを尊重したケアは女性の主体的な出産を支援するために貢献できることを提案する。さらに、今後の展望として、看護学教育における教材開発および看護アセスメントツール等を活用した実証的な実践研究が期待される場所である。